

学業生活と新婚生活

第2期 OB 内藤 聖一

こんにちは。小野晃典研究会第2期の内藤です。この度はOB・OG会誌第2巻発刊おめでとうございます。

現在私は勤めていた会社を退職し、2008年4月に慶應義塾大学大学院経営管理研究科（通称KBS、慶応ビジネススクールの略）というMBAに進学し、優秀な生徒たちにもまれながらケースメソッドと格闘する毎日を送っております。また同年3月には学生時代からお付き合いをしていた女性と結婚するなど、2008年は私にとって大きな転機を迎えた年でありました。本稿ではKBSでの学業生活の苦勞及びそこでしか得られない魅力、なぜ私がMBAを志したかについて、新婚生活という要素を絡めながらご紹介させていただければと思います。

ご存知の方も多いと思われませんが、MBAとはMaster of Business Administrationの略で、日本語では経営学修士と呼ばれています。MBAプログラムは、研究者ではなく企業経営の実務家を養成することを狙いとしており、小野ゼミでも使用されているようなケースを題材にして、トップマネジメントの視点で企業が抱えるissueを探り出し、解決に向けた議論を学生間で行うという教育アプローチを取っています。ケースメソッドによる教育は各MBAスクールによって使用される比率が異なりますが、KBSはケース発祥の地であるハーバードビジネススクールと同様、ほぼ全ての授業でケースディスカッションを行うという特徴を持っています。ケースメソッドの運営スタイルは小野ゼミで行われているようなグループ発表形式とは異なり、MBAでは毎回の授業で1.5時間10名程度のグループに分かれて学生のみでのディスカッションを行い、その後また1.5時間かけて50名程の学生間でクラスディスカッションを行い、教授がディスカッションのファシリテーター（議論の司会役）としてディスカッションを問題の核心へと導いていきます。科目はMarketing, Finance, Accounting, Organization, Strategy等経営に関する分野を多岐にわたって取り扱います。題材は、例えば「ダイムラーとクライスラーがM&Aを行った際、両社の企業価値はいくらが妥当か？合併方法は現金買収が妥当か？株式交換が妥当か？」というFinanceのケースや「モスバーガーのこれまでの成功要因と今後考えられる課題に対するマーケティング戦略を検討せよ」というMarketingのケース、「資生堂のフランス市場開拓の際にとられた組織的特徴と課題を挙げ、解決策を検討せよ」というOrganizationのケースなどです。ディスカッションの中ではケースを読んで各生徒が考えるissue及び解決策をぶつけ合うのですが、皆自分がこの会社の社長であればこうする！という意気込みを含めてディスカッションするため、時に非常に白熱します。生徒は金融機関やコンサル、メーカーなど多様な職種かつ幅広い年齢層（私の同期は平均年齢31歳、新卒から40歳まで）の方々が一同に会するため、互いが有するバックグラウンドも様々です。自分の意見が受け入れられないことも多々あり、その都度自分の意見の稚拙さを皆の前で思い知らされます。しかしそのような身をもった体験を繰り返すことで、自らの考えやスキルを日々ブラッシュアップすることがケースメソッドの目的であり、私自身約10ヶ月のMBA生活の中で日々自らが鍛え上げられている事を実感しています。特にKBSは日本国内の優秀なビジネスマンや、ロ

シア、アジア諸国から国費で派遣されてきたエリートたちが集まるため、各業界でのビジネスの進め方の違いや各国間の文化、商慣習の違い等ビジネスに関する知的好奇心を満たす場として最高の場所である事を感じる毎日です。また MBA は MBA 卒専用の job market も存在し、コンサルや投資銀行（現在はマーケットが消滅に近い状態ですが）への就職、マーケティングマネジャー等将来のキャリアプランにプラスになることが多々あります。もちろん MBA だから就職が優遇されるということではなく、多分に本人の努力によるスキルアップによるところが大きいのも事実であります。

以上は MBA 進学という選択のメリットを書き上げましたが、得られるものと同等、人によってはそれ以上に失われるものも大きい選択でもあります。失われるものとしては、お金、時間、就業機会が挙げられます。グロービスのような働きながら通える MBA や夜間開講のパートタイム MBA 等も近年では増加傾向にありますが、多くの MBA は退職ないし企業派遣による 2 年間の通学というスタイルです。就業していれば得られたであろう 2 年分の賃金マイナス分+高額な授業料（KBS の場合 2 年で約 400 万）というキャッシュフローが重くのしかかります。また仕事から得られる経験やスキル、会社でのポジション等 MBA とは異なる成長機会を失うことも事実です。最後に挙げられるのは、2 年間の中での自由時間が極度に失われることです。ある意味充実の証でもあるのですが、MBA は学生に対して過剰な負荷をかけることでも有名です。KBS の場合、1 授業につき 1 ケースが割り当てられ、20 ページ~30 ページほどのケースの読み込み及びディスカッション準備に平均 3 時間ほどかかり、それを 1 日 1、2 科目計約 8 コマ（週）ずつ進めていきます。ケースを予習しないと授業中はまったくディスカッションに加わることが出来ないため、何も得るものがなくなってしまいます。また学業ですので当然成績がつくのですが、学期末のペーパーテストとディスカッションの発言内容により評価されます。成績が悪ければ留年ではなく、即退学という厳しい処置が待ち構えているため、学生たちは尻に火がついたように勉学に取り組むことになります。このような学生へのプレッシャーは、インセンティブという意味では合理的なシステムだと私自身は考えますが、毎日深夜まで続く予習によって睡眠時間が削られる日々が続き、貧血で倒れ救急車で搬送される学生や過度のストレスに耐え切れず、途中で自主退学していく同期たちがいたのもまた事実です。

上述したとおり、MBA 進学のメリットとデメリットを記載しましたが、最後に私自身がなぜ MBA 進学を志したか、多数の苦難をどのように乗り越えてきたか（乗り越えていると勝手に思い込んでいるか）について、結婚というもう 1 つの転機と絡めて記載したいと思います。以降はおのろけの要素も含まれることが多分にあるかと思われませんが、新婚さんだということでお許しいただければと思います。

私が MBA を志した理由は大きく分けて 2 つあります。1 つは私の父が祖父の代から続く不動産会社（町の不動産屋さんではなくビルの開発、販売等を行う中小規模の不動産会社）の社長であり、私とその跡取り候補であったことから、幼少のころより経営に携わるという自我が芽生えていたことにあります。そのため経営者を輩出することが大きな目的の 1 つである MBA は大学時代より描いていたキャリアパスの通過点の 1 つであったことが理由の 1 つです。MBA はケースメソッドを通して経営の疑似体験をする場でもあり、将来の大きな糧となることに疑いの余地がないと考え進学を決意し、かつその意思決定は正しかったと考えています。失われるものが多いのも事実ではありますが、人生という長いスパンでこの 2 年間を捉えれば、私にとって見れば取るに足らない損失であり、むしろ進学を躊躇することによって失われたであろう、MBA を通してしか得られない自らのブラッシュアップや成長機会、優秀な同期たちとの絆の方がはるかに大きいものであると考えています。

2つ目の理由は、私が私の妻に最良の人生を歩んでもらいたいと心から願っているからです。MBAに進学し、努力を積み重ねて多くのことを経験することは、率直に言って私の生涯賃金キャッシュフローを高め、それが以前勤めていた会社で一生を過ごすことに比べてはるかに多いチャンスをもたらすことが期待されたからであり、努力の結果が将来の夫婦生活に良い影響をもたらすと判断したからです。新婚生活、という意味では、私は妻に多くの犠牲を払ってもらっています。恐らく通常の新婚さんに比べて夫婦で共有できる時間がすごく少ないと思われるからです。平日は大学で勉強、帰宅しても自分の部屋にこもって予習、休日も自分の部屋か大学図書館で自習することが多く、共有できるのは休日のわずかなフリータイムと平日の夕食及び皿洗いという共同作業の時に限られている毎日です。このようなおおよそ新婚さんらしくないドライな関係が続いても、妻は文句1つ言わず、生活の足しにとアルバイトをし、家事を行い、私が勉強に集中できる環境を整えることに専念します。私が体力的、精神的にまいっているときにも、私の心の支えとなり、そのような妻の存在が私をさらに奮い立たせるモチベーションの源泉となっていることは、学業生活と新婚生活を両立させている重要な要素であると思っています。同期の中には奥様から会社を辞めてまでMBA進学をすることの理解が得られず、勉強に専念できないでいる同期、共有できる時間が少ないことや家計が苦しくなったことを理由に在学中に離婚した同期がいるのを見ると、あらためて自分が恵まれた環境におかれていることをかみ締めています。

上述したとおり、MBAに進学することは、それ相応の覚悟が必要になります。しかし幾多の困難を乗り越えることそのものが人生経験となると共に、社会人を経てなお学ぶことが出来るという例えようのない喜びをここにしたためて、私のOB会誌寄稿を終わらせたいと思います。



クラスメイトとグループワーク中（著者は左奥）